

## 陸軍看護兵「緒方惟芳」の日露戦争(1)

磯 永 和 貴・山 本 孝 夫

人間科学部国際交流学科  
isonaga@toua-u.ac.jp

元山口県立高等学校教諭  
yamal931@c-able.ne.jp

### はじめに

日露戦争において日本陸軍は、軍人・軍属を合わせて約23万8千人を投入した。その損害は、戦死者が約8万4千人、負傷者が15万3千人におよんだ<sup>1)</sup>。これだけの戦死者や負傷者に対して直接救護活動を行った陸軍看護兵（以下、看護兵と略）は、いかなる救護を行い、どのように日露戦争をみていたのであろうか。

日露戦争に直接参戦した記録であるいわゆる「従軍日記」は、新井勝紘の研究によると平成12年の時点において全国で30点が知られている<sup>2)</sup>。その後、現在にいたるまで11年余が経っていることから自治体史などによってより多くのものが発見されていることであろう。実際に筆者は、刊行された日露戦争の看護兵が遺した従軍日記を探したところ大澤喜三郎の記した『日露戦争陣中日誌－看護兵の証言－』<sup>3)</sup>を知りえた。しかし、日清戦争の約13倍もの軍人・軍属が戦ったにしては、日露戦争の日記はあまりに少ないと言わざるを得ない<sup>4)</sup>。

本論で対象とする日露戦争に従軍した看護兵の遺した「日記」も少なく、管見の範囲では先の大澤の日記の他に、多田海造（近衛歩兵第二聯隊衛生兵）『日露役陣中日誌－看護兵の六七五日－』<sup>5)</sup>、竈源次郎（第六師団看護卒）『征露従軍日記』<sup>6)</sup>だけであった。このように史料の残存も少なく、残念ながら日露戦争における看護兵の実態についての研究は未だ進展しているとはいいがたい<sup>7)</sup>。

本論は、看護兵であった緒方惟芳（おがた た

だよし、第五師団歩兵第二聯隊補充大隊）が日露戦争に従軍した時に記録した新出の史料である「軍隊手帳」、「日記」（3冊）を翻刻し、「写真」などを提示して解説をする。特に、看護兵であった惟芳の撮影した写真は、日露戦争の具体的な救護活動を検討する材料として貴重な史料である。本論の目的は、はじめて日本が経験した未曾有の戦死者・負傷者を出した近代戦としての日露戦争を、陸軍看護兵であった緒方惟芳の史料を通して、明らかにすることにある。

本史料紹介は、史料が多いことから、(1)と(2)に分けることとした。(1)では、まず、翻刻を読むにあたっての基礎的検討として、緒方惟芳の関係史料の概略を述べ、惟芳の略歴を紹介し、彼の所属していた広島第五師団の日露戦争での戦闘を略述することにする。そのうえで、基礎資料である「軍隊手帳」と「日露戦争従軍日記一」の翻刻を紹介する。(2)では、「日露戦争従軍日記二」、「明治40年懐中日記」の翻刻を紹介し、写真資料を関連地図とともに紹介し、従軍行程や野戦病院などの位置について検討を行うものである。

ところで、緒方惟芳の関係史料を知りえたのは、東亜大学の同僚の山本達夫氏（西洋史）の紹介による。山本達夫氏の父である山本孝夫氏は、同人誌の『風響樹』に小説「杏林の坂道」を連載されていた。それを2012年に『杏林の坂道』（私家本）として出版されたものを磯永が寄贈を受けた。その小説の日露戦争の記述は、山本孝夫氏の従兄である緒方正道氏（宇部市在住、元医師）の父である惟芳が記述した日記が基になっており、その一

部が引用されていることを知ることができ、山本達夫氏から惟芳が撮影したと伝えられる写真を見せていただいた。日露戦争に従軍した看護兵の史料として、日記と写真、軍隊手帳が残っているのは稀有なことである。緒方正道氏に連絡をとっていただいたが、高齢のこともあって、なかなか話がスムーズに伝わらなかった。そこで、山本孝夫氏から緒方正道氏に数度にわたって交渉をしていただき、ようやく日記と写真を発見できたという吉報に接した。早速、山本達夫氏の案内で緒方正道氏宅へ出向き、山本孝夫氏と現地で合流し、史料を実見することができ、緒方正道氏に借用をお願いしたところ快諾を得た。改めて、所蔵者の緒方正道氏、史料の発見にご尽力いただいた山本孝夫氏と山本達夫氏に対して深く感謝したい。

また、すでに山本孝夫氏は惟芳の日記を翻刻されていたので、その翻刻を提供いただいた。磯永は、その翻刻をもとにして校訂を加え、原文は縦書きであるが、横書きとした。漢字の旧字体は固有名詞などを除いて原則として新字体として、句読点などを付して読みやすくし、【】で補注を付している。解説が不明な文字は、□で表示した。歴史用語のなかには、現代において不適切なものもあるが、歴史的事実を重視してそのまま使用した。本論は磯永と山本孝夫氏との共著としたが、一切の責任は磯永にあることを断っておきたい。

## 1. 緒方惟芳関係史料

まずは、緒方惟芳の遺した関係史料そのものの概略を紹介しておこう。

惟芳に関する日露戦争の関係史料は、①「日露戦争従軍写真帳」、②「軍隊手帳」、③「日露戦争従軍日記一」④「日露戦争従軍日記二」、⑤「明治40年懐中日記」の5点である。①～④の史料は題名がないので、改めて磯永が付けたものである。

①「日露戦争従軍写真帳」【写真1】は、縦27cm5mm×横20cm7mm、厚さ1cmの大きさで、表紙から裏表紙まで20枚の和紙にまとめられた写真帳である。閉じられた紐は新しいものである。表紙には表題はなく、裏表紙には「欄外」と墨書がある。写真は、その四隅を和紙の切り込みで留めてあり、簡単に取り外すことができる。写真の裏側には書き込みがあることから、これを見るこ

とができるように工夫したものと考えられる。写真は現在67点が残っているが、写真を留める切り込みから考えると4枚の写真が失われているものと考えられる。写真の撮影者は、緒方惟芳の子供たちの証言によると惟芳本人であったという。惟芳は、写真を趣味としており自分で現像も行っていたらしい。当然ながら惟芳本人が写っているものは、他人が撮影したものであろう。また、日露戦争には従軍した写真家もいたので、その写真も含まれている可能性があるものと思われる<sup>8)</sup>。

また、従軍した順番に貼られているわけではなく、明らかに写真に付された解説と合わない箇所もある。そこで、各写真については、後述する「3. 広島第五師団の戦闘と緒方惟芳」において適宜該当する個所に添付した。

②「軍隊手帳」【写真2】は、惟芳の軍隊での経歴を知る上での基本史料である。縦12cm5mm×横8cm7mmである。表紙には朱字で「緒方惟芳」名が書かれており、厚紙とキャンパス地で包まれた頑丈な作りである。表紙の裏にも朱字で「緒方惟芳」名が書かれている。1～16頁までは明治15(1882)年1月4日のいわゆる明治天皇の「軍人勅諭」が印刷され、続いて18～20頁には大正元年7月31日のいわゆる大正天皇の「軍人勅諭」が差し込まれている。21頁の「誓文」の個所には、自筆の墨書で「明治36年12月15日」と書かれているが、これは緒方惟芳が広島第五師団第一中隊に編入した年月日に一致する。入隊から日露戦争、そして衛戍病院へ、さらに大正10(1921)年の「簡閲点呼」までの期間の履歴が判明する。

③「日露戦争従軍日記一」【写真3】は、明治37年8月28日から翌38年3月31日までの縦7cm5mm×横11cm、厚さ1cm3mmの頑丈な黒色の手帳に鉛筆で記された日記である。上部に鉛筆が差し込める紙のホルダーが付いている。表紙に「日進」の文字があり、表と裏表紙に軍艦が凹凸の浮彫となっている。裏表紙には手帳が開かないように緑色のゴム紐が付けられていたが、現在は切れて一部分が残っている。なお、日進は、アルゼンチン海軍から発注されイタリアで建造されたが、日本が日露戦争前年の明治36年にアルゼンチン海軍から購入した一等巡洋艦(装甲巡洋艦)である。日露海戦では、山本五十六が乗艦してい

た。

④「日露戦争従軍日記二」【写真4】は、明治38年4月1日から7月8日まで（ただし、本手帳の5月4日から6月7日までの記述がなく、7月9日以降をまとめて記している）の縦15cm×横9cm3mm、厚さ1cmの頑丈な赤茶色の手帳に鉛筆で書かれた日記である。手帳の裏表紙に鉛筆のホルダーが付けられ、表紙との間の小口に収まるようになっている。本日記の明治38年7月9日には、「本日ヨリ以降、多事心勞シ為メニ日誌ノ思ヒモ何時シカ去リヌ。」とし、それ以降の日本にもどるまでの記述をまとめて書いている。こ

のことは、これまでの日記がほぼ毎日戦場で記されていたことを示している。

⑤「明治40年懐中日記」【写真5】は、縦13cm×横8cm5mm、厚さ1cmの大きさの「博文館」製の市販された手帳型の日記帳である。日露戦争の後に広島衛戍病院での勤務を記録した日記であるが、日露戦争がこれまでにない未曾有の負傷者を出しており、彼らの広島衛戍病院での入院生活の一端を伺うことができる。また、衛戍病院での看護や医術の実態を知る上でも重要な意味を持っている。

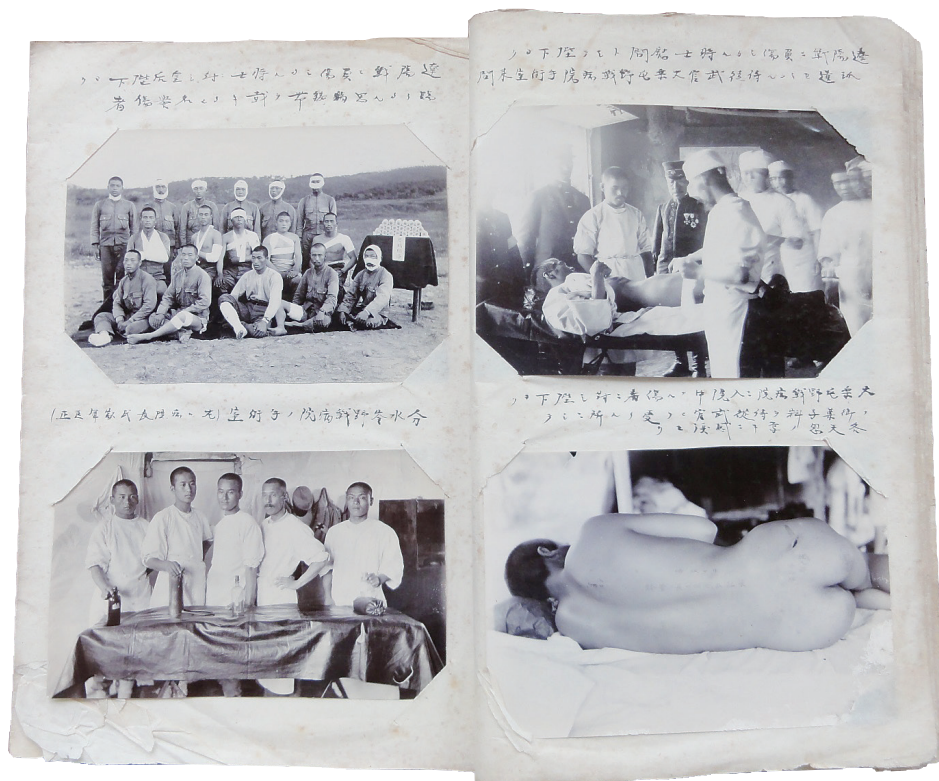


写真1 ①「日露戦争従軍写真帳」



写真2 ②「軍隊手帳」

※写真左表紙、写真中央裏表紙、写真右は軍隊手帳の履歴部分



写真3 ③「日露戦争従軍日記一」



写真4 ④「日露戦争従軍日記二」



写真5 ⑤「明治40年懐中日記」

## 2. 緒方惟芳の略歴

ここでは、緒方惟芳の略歴を②「軍隊手帳」と④「日露戦争従軍日記二」の惟芳が明治38(1905)年6月15日に記した「略履歴」でたどっておこう。

惟芳は、父尚一、母マサの長男として明治16年3月19日に「山口県阿武郡萩町大字堀内401番地」に生まれた。緒方家は代々萩藩士の家柄である。明治22年4月1日に「明倫尋常小学校」へ入学し、同26年3月21日に卒業した。同年4月1日に「明倫高等小学校」へ入学、同30年3月31日に卒業している。明治30年9月1日に、「山口県尋常中学校」(明治28年4月設立)の「萩分校」(4年制)に入学し、同34年5月25日に「山口県立萩中学校」を「家事ノ都合」により退学した。なお、山口県尋常中学校萩分校は32年4月に山口県山口中学校萩分校と改称され、同32年9月に山口県萩中学校(5年生)となり、萩市向山より堀内に移動し、同34年5月に山口県立萩中学校と改称している。

その後、同34年から36年までの1年半ほどの間、惟芳は長崎市の「三菱合資会社三菱造船所」に勤務したようである。明治36年に20歳になった惟芳は徴兵検査を受け、明治36年12月15日に初年兵として「第一中隊編入」したとある(以下、断りの無い限り「軍隊手帳」によった)。翌明治37年2月10日に日本は、ロシアに対して宣戦布告をした。惟芳が第一中隊に編入したのは、日露戦争が勃発する約3ヶ月前のことであった。彼は阿武郡の出身であったので「山口聯隊区」において徴兵され、「第五師団第21旅団歩兵第四十二聯隊」(現、山口市)へ入営したものと考えられる。

惟芳は初年兵として6か月の訓練の後に、明治37年5月8日に「看護学修業」を命じられている。3か月後の同年8月8日に「看護学卒業」をした。「日露戦争従軍日記一」の8月28日の記録によると「工兵第五大隊ヲ出ツ」とあるので、広島第五師団工兵第五大隊において看護兵としての訓練を受けた可能性があるが判然としない。8月28日に「工兵一等卒」として「看護手」となり、「歩兵第十一聯隊(広島)補充大隊へ転出」を命じられた。翌日の明治37年8月29日に広島宇品港より出発し、9月2日に中国の遼東半島の「南尖」に上陸、明治39年1月3日ようやく広島宇品港へと戻った。約1年4か月にわたって日露戦争に看護兵として従軍したのであった。

その後、惟芳の隊は明治39年1月6日に解隊となるが、彼は同日に「広島予備病院附」となり残務整理や病院での看護にあたった。同年9月29日に復員したが、10月3日に広島衛戍病院に「仮編入」して、さらに12月1日に「広島衛戍病院附」として再度兵役に復帰し、病院での看護の傍ら勉学に励み医師への道を目指す。明治44年には医師免許を修得し、大正元(1912)年11月30日に「現役満期」となり、翌12月1日に「後備役」に編入された。それを機にして、同月に「山口県阿武郡宇田郷村」(現、山口県阿武郡阿武町大字宇田)で病院を開業したのであった。

当時の看護兵は、「隊附」と「病院附」の2種類があったが、前者は部隊について戦場に赴くが、後者は基本的に陸軍病院で勤務するものであった。惟芳は、看護兵として「隊附」であったが、その後「病院附」となった。兵役は「現役」2か

年の内1年4か月を日露戦争に従軍し、その後6年にわたって広島衛戍病院で看護にあたり、その最中の明治44年に医師の免許を取得した。軍隊での生活は、8年余に及んだ。大正元年12月に後備役に編入されると山口県阿武郡宇田郷村に病院を開業して地域医療に尽力し活躍し、昭和20(1945)年の敗戦の年の9月14日に62歳の生涯を閉じたのである。

### 3. 広島第五師団の戦闘と緒方惟芳

緒方惟芳が第五師団歩兵第十一聯隊補充大隊の看護兵として広島の宇品港より出発したのは、明治37(1904)年8月29日であった。同年2月10日に日本は、ロシアに対して宣戦布告をして日露戦争が勃発しているの、半年余りが経っていた。惟芳の看護兵としての日記を読む前提として、広島第五師団の戦闘と惟芳の②「日露戦争従軍日記一」の記録との関係を検討しておこう。なお、第五師団の動向については、村上哲夫『広島師団の歩み』広島師団の歩み編纂委員会、1961や陸上自衛隊第13師団広島師団史研究委員会編『広島師団史』陸上自衛隊海田市駐とん部隊修親会、1968などを参照した。

(1)第五師団の出発 まずは、緒方惟芳が日露戦争へ従軍する遼陽会戦までの第五師団の状況を概観する。

第五師団が位置する広島は、明治27年の日清戦争時に大本営が設置され兵員の輸送と兵站基地として機能した。日露戦争時は大本営こそ設置されなかったが、兵員たちは宇品港から船で大陸へと輸送され、広島は一大兵站基地として機能し、後に惟芳が務めた広島衛戍病院も多くの負傷した患者であふれたのであった。

日本は、明治37年2月4日の「緊急御前会議」において対露開戦を決定し、同月6日にロシアに国交断絶を通告。同月8日に陸軍は、第一軍に属する第十二師団の先遣部隊が朝鮮半島の仁川に上陸し、同時に海軍も仁川沖のロシア艦隊と遼東半島最南端に位置した大連市にあるロシアの要塞でかつ軍港であった旅順港を攻撃した。翌9日にも海軍は仁川沖でロシア艦隊と交戦した。2月10日にロシアに宣戦を布告し、翌11日に宮中に大

本営を設置した。2月24日に旅順港の入口に船を沈めて港のロシア艦隊の出港を妨げる旅順港閉塞作戦を3次まで実施したが失敗に終わった。

3月29日に第一軍の主力は、平壤の南に位置する鎮南浦に上陸して北上を開始し、4月28日に大韓帝国と清国の国境に位置する鴨緑江の渡河作戦に入り、ロシア軍との大規模な陸上戦闘が始まった。ロシア軍の守備する九連城を攻撃したが、ロシア軍はすぐに撤退した。

5月5日に第五師団の出発をまたずして第二軍は遼東半島の沙河河口に上陸を開始した。15日から18日にかけて第五師団は広島の宇品を出港し、5月20日から23日の間に遼東半島の張家屯に上陸し第二軍に合流した。第二軍は背面からの攻撃を恐れ、第五師団を普蘭店と大沙河に配置した。5月25日に第二軍の主力は、旅順の要塞を孤立すべく金州と南山への攻撃を開始し翌26日占領、続いて5月30日には大連を占領して旅順を孤立させることに成功した。6月4日には、旅順攻略のために第三軍が上陸した。これに対してロシア軍は、6月6日に3個師団を旅順救援のために南下させ利徳寺方面にいたった。第二軍は6月13日に北上を開始し、14日にロシア軍と利徳寺において交戦開始し、15日に第五師団を主力に戦い、第三師団、第四師団、騎兵第一旅団の攻撃で、混乱したロシア軍は撤退した(第五師団の死者39名、負傷者168名)。

この利徳寺戦から後に日本軍の第一軍、第二軍、第四軍は撤退するロシア軍を追いながら北上し包囲する作戦計画を立てた。ロシア軍は、徐々に撤退しながら交通の要衝である遼陽に軍を集結して対抗する作戦に出た。

また、旅順に対しては第三軍が包囲網を広げていたが、ロシア軍も強固な布陣を布いて日本軍の攻撃の準備に余念がなかった。日本軍は、遼陽と旅順の二方面に分かれて戦うこととなり戦争の長期化へとつながった。旅順総攻撃は第一次(8月19日から24日まで)、第二次(10月26日から31日まで)、第三次(11月26日から明治38年1月1日)の3回の攻撃でようやく陥落した。

第四軍に新たに所属することになった第五師団は、北へと撤退するロシア軍を追い、7月24・25日に蓋平・大橋付近でロシア軍と戦った(蓋平戦

／死者8名、負傷者26名。大橋戦／死者86名、負傷者367名)。つづいて7月30日～8月1日に折木城付近において第五師団は交戦するもロシア軍の撤退によって打撃をあたえることはほとんどできなかった(死者25名、負傷113名)。

ロシア軍は遼陽に撤退するとともに援軍を送って守りを固めた。日本軍は第二軍と第四軍が南から攻め、第一軍が北から挟み撃ちにする作戦をとった。日本軍は、作戦の開始が遅くなればロシア軍が増強されることを恐れ、8月22日に遼陽に向かって進撃命令を下し、8月26日には遼陽に対する攻撃を開始、ロシア軍の強固な布陣で進めず一時作戦を中止したが、再び前進した。9月1・2日に遼陽城の包囲を開始し、3日に遼陽城へと突撃し、4日に遼陽城を占領した(死者409名、負傷者1785名)。

(2)遼陽会戦・沙河会戦の看護 前述したように惟芳は、この遼陽会戦がはじまるとともに明治37年8月28日に歩兵第十一聯隊補充大隊へ転属を命じられた。緒方惟芳は、本格的な第四軍第五師

団とロシア軍の総力戦に参加すべく、翌29日に第四軍第五師団歩兵第十一聯隊補充兵とともに隊附看護兵として宇品出帆、遼陽総攻撃中に9月2日に遼東半島の南尖に上陸し、ただちに遼陽を目指した。ここでは、遼陽会戦以降、翌38年3月31日までの惟芳の看護活動を中心に検討する。

9月6日遼陽が陥落し、同月15日に遼陽に至り、翌16日に第五師団第四野戦病院(大楽屯)に到着した【写真6】。翌17日から同月24日まで同地において看護活動に従事している。第四野戦病院における看護活動は、17日に江口看護長の下で第四・五・九病室の事務付となった。18日には、野戦病院の負傷兵を看護卒と潘家炉戦地定立病院へ転送する任務を行っている【写真7・8】。19日の第四野戦病院は遼陽会戦の負傷兵の入退院で混乱を極めた。20日に惟芳は、丸山看護長の下で一・二号室の病室附となる。この日、一人の兵士の死をみとった。これらの負傷兵は、遼陽会戦における傷ついた兵士たちであったと考えられる【写真9】。21・22日は、侍従武官である伊藤瀬平少佐の来院に備えて病院内の大掃除



写真6 大楽屯野戦病院の看護兵

※写真の裏に鉛筆で「大楽屯」とある。写真の解説には「大楽屯ニ於テ写セシ病院職員」と記載されている。写真の隊員は15名で、腕に赤十字の入った腕章をつけている。「日露戦争従軍日記一(以下、日記と略)」によると9月16日に大楽屯に到着し第四野戦病院を開設し、同月26日に出発している。

を行った。23日には、伊藤侍従武官、高階侍医、軍医部の一団が野戦病院を訪れ、明治天皇からの「御菓子料」が負傷兵に配られた【写真10】。なお、日記には記されていないが、皇后からの「恩賜包帯」も配られている【写真11】。また、遼陽会戦において戦死した将兵の招魂祭も行われた【写真12・13】。24日には、患者を第十師団の衛生予備員に引き継ぎ、第四野戦病院から出発する。これが、日露戦争における惟芳の本格的な看護活動であった。なお、遼陽で撮影された写真を掲げておく【写真14・15・16】。

これより後に10月入ると第五師団は沙河を越えようと北上を続け、沙河の会戦で激闘を続けている。ロシア軍と10月10日に五里大子と北大山で戦闘を開始し、10月13日紅宝山、10月15～20日に万宝山で戦闘を繰り返し10月の下旬にいたったが、一進一退の状態となった。特に、第五師団は10月末の北大山から首山堡の攻撃では、日露戦争開戦以来の死者130名、負傷者676名を出すこととなった【写真17】。第五師団の沙河会戦では全体の死者が356名、負傷者が857名を数え、北山から首山堡の戦いがいかに過酷なものであったかがわかる。後述する惟芳の新庄での第六

師団の「患者療養所」での看護は、北山から首山堡の戦いにおける負傷者に関係していると考えられる。

惟芳らの隊は、9月26日から10月19日まで寒さと夜襲に怯えながら、露営をしつつ第五師団の部隊とともに行軍を続けた。途中、10月7日には惟芳自身が感冒に罹っている。10月20日には新庄の第六師団野戦病院に到着し、23日に「患者療養所」を開設した。惟芳は感冒を思い休養していたが、午後5時に多くの患者が入院したために勤務に就き、午後7時から檜高看護長と第四・五病室で1時まで看護をした。24日には、惟芳は歯痛と下痢に苦しみつつ患者40名を煙台定立病院に搬送している。翌25日も患者の入退院が続き、煙台定立病院へと転送が続いた。「患者療養所」28日まで看護にあたったが、29日「患者療養所」を閉じて「野戦病院」を開院したが、30日にはその野戦病院は第一野戦病院が引き継ぎ、惟芳は同地を離れて第二病隊に編入された。

10月下旬から翌2月までの間、日本軍とロシア軍は沙河を挟んで対峙することとなる。第二病隊の惟芳たちは、10月31日から11月6日には下台子で宿営したが、11月7日に李家達連溝に



写真7 大楽屯からの患者を担架で搬送

※写真の裏に鉛筆で「大楽屯患者後送」とある。写真の解説には「支那人夫ヲ使役シタル僕架【ママ、歩荷のことか】ニテノ後送ノ況」と記載されている。簡易な手作りの担架で1人の患者を4人の中国人を使って患者を搬送している。患者は7人ないし8人で、日差しをよける白い布がかけられている。同頁には写真8が貼ってあり、患者の搬送は担架と荷車を使ったことがわかる。荷車の患者は座っていて軽傷であることから、担架の患者は重症患者であったのであろう。写真7・8は、日記の9月14日に行われた「瀋家炉戦地定立病院」への患者転送の状況である。



写真8 大楽屯からの患者を荷車で搬送

※写真の裏に記載はないが、集落の風景が同じなので大楽屯からの患者を荷車で輸送していることがわかる。写真の解説には「支那車輛ヲ応用シタル患者ノ後送ノ実況」と記載されている。先頭の車両の白い服を着ているのは、負傷兵の入院着である。1車両に4人ないし5人が乗り、日よけの幌がかけられている。

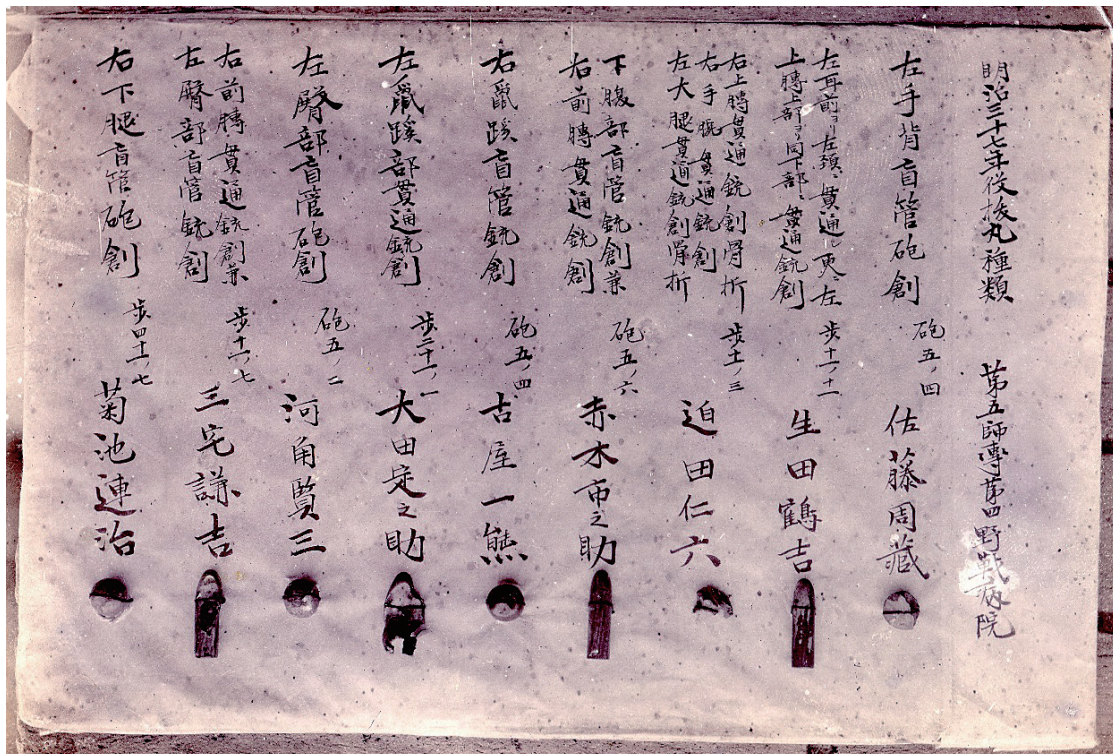


写真9 第四野戦病院の負傷兵の銃創・砲創

※写真の裏に記載はない。写真の解説には「抜丸変形ノ変名ナルモノ」とある。写真の第一行目には「明治三十七年役抜丸種類 第五師団第四野戦病院」とあり、9名の兵士の銃創・砲創の弾が下部に貼り付けられている。各人の弾の貫通箇所や傷の様子などが記され、所属隊と氏名が記載されている。





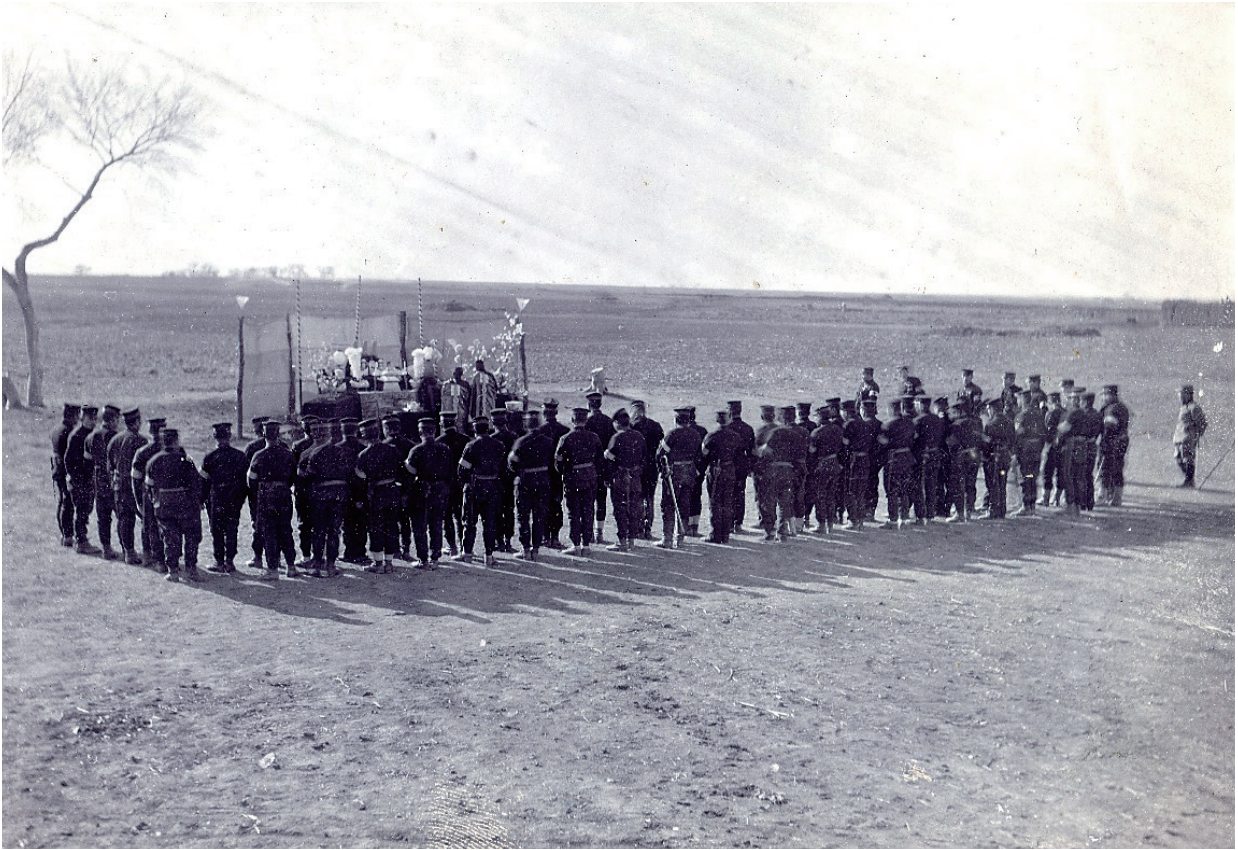
写真10 第四野戦病院手術室内を見学中の伊藤瀬平侍従武官一行

※写真の裏に記載はない。写真の解説には「遼陽戦二負傷シタル将士慰問トシテ陛下ヨリ派遣セシタル侍従武官大楽屯野戦病院手術室来問」とある。伊藤瀬平陸軍少佐（中央の髭の人物）は明治35年から39年の間、侍従武官であった。同頁には、写真は失われているが解説があり「大楽屯野戦病院二入院中ナル傷者二対シ陛下ヨリノ御菓子料ヲ侍従武官ヨリ受タル所ニシテ各天恩ノ厚キニ感涙セリ」とあり、患者に「菓子料」が配られたことがわかる。日記には9月21・22日に侍従武官一行を迎えるために清掃をしたこと、24日に侍従武官一行の来訪が記されている。



写真11 「恩賜包帯」

※写真の裏に記載はない。写真の解説には「遼陽戦二負傷シタル将士二対シ皇后陛下ヨリ賜リタル恩賜包帯ヲ戴キタル名誉傷者」とある。日記には記載がないが、恐らく伊藤侍従武官一行の来訪時に渡されたものであろう。



**写真12 第四野戦病院における「招魂祭」**

※写真の裏に記載はない。写真の解説には「【文字欠】二於テ第五師団第四野戦病院ノ招魂祭」とある。解説には場所の記載がない。日記にも記載がなく詳細は不明であるが、第四野戦病院で行われた遼陽戦の戦死者の「招魂祭」である。各兵士は、腕に赤十字の腕章をつけており、看護兵たちであったことがわかる。



**写真13 第四野戦病院の「招魂祭祭壇」**

※写真の裏に記載はない。写真12と対をなしている。写真の解説には「前図同断祭壇ヲ示ス」とある。



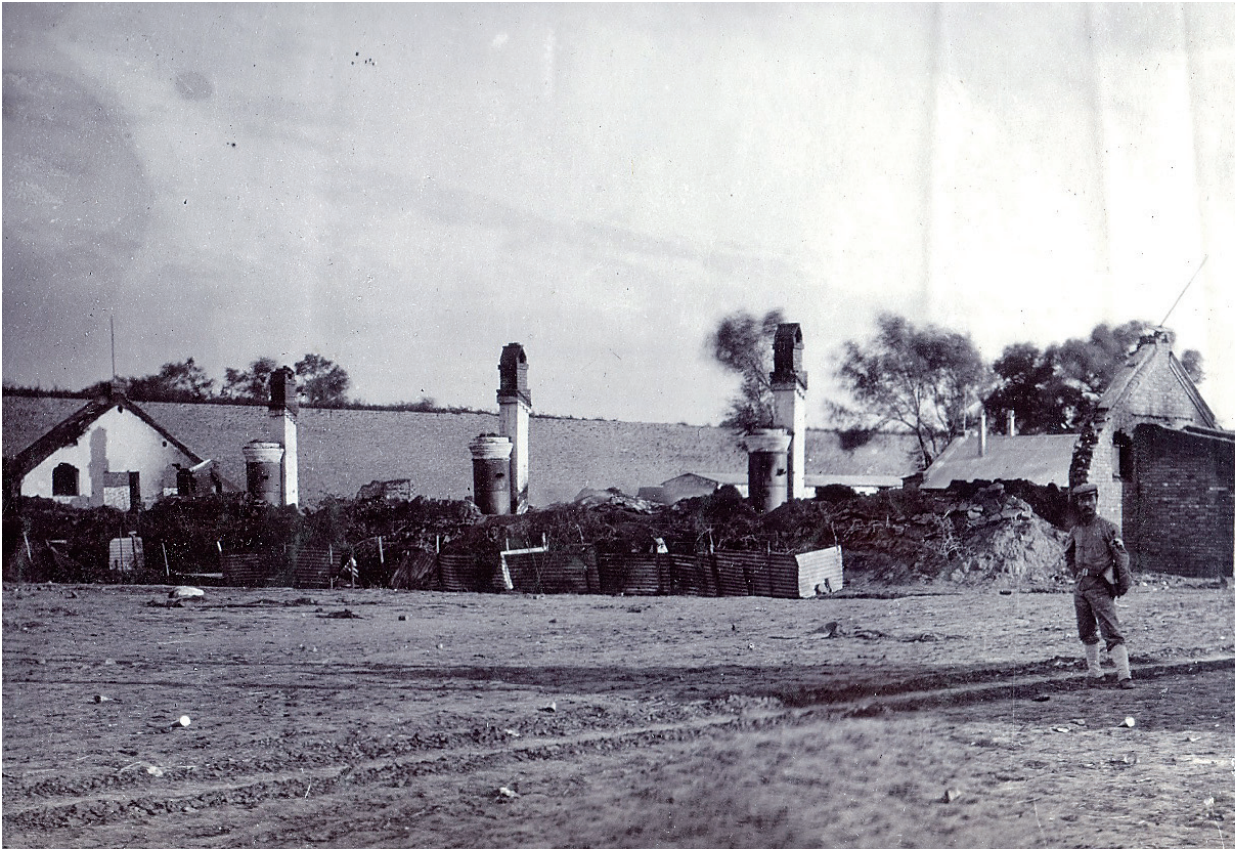
写真14 遼陽駅

※写真の裏には遼陽と鉛筆で記載がある。写真の解説には「遼陽停車場ノ実況」と題があり「図中ノ家屋ハ露国ノ建築シタル停車場及兵営」と説明がある。写真15と同頁に貼られていることから、同じ日に撮影されたのかもしれない。しかし、日記の明治37年11月21日に惟芳が遼陽へと買い物に行った記述に「羅馬塔ノ如キ停車場ノ如キハ、遼陽ニテ会テ見サル所ニテ、実ニ愉快ナリ」とあり矛盾する。



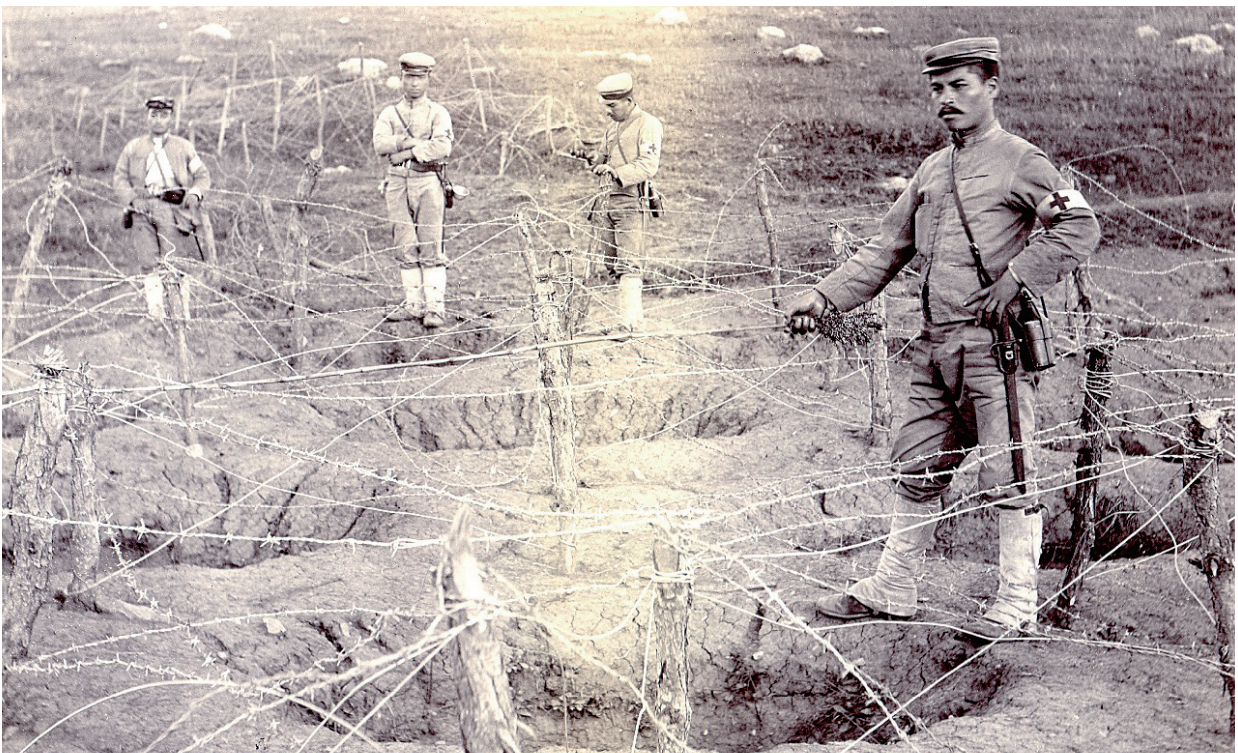
写真15 遼陽南門からみた市街地の様子

※写真の裏には「南門ヨリ見ル遼陽市街」と鉛筆で記載がある。写真の解説には「南門ヨリ望ミタル遼陽市街」とある。日本兵の姿が見られるが、赤十字の腕章をつけているので看護兵である。各家屋の軒先には、日の丸の旗が掲げられている。日記によると明治27年10月10日に惟芳は遼陽南門を通過しているが、この日に撮影されたかは不明。



**写真16 遼陽戦で破壊されたロシア人の家屋**

※写真の裏には「遼陽ニテロスノ家屋」と鉛筆で記載がある。写真の解説には「遼陽戦ニヨリテ兵火ニ災フタル露国ノ家屋」とある。手前にたたずむ兵士は、赤十字の腕章をつけているので看護兵である。日記に記載がなく、撮影日不明。



**写真17 首山堡のロシア軍陣地**

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「首山堡ノ露兵設置鉄条網」とある。手前に立つ看護兵によってその服装と装備がわかる。



写真18 李家達連溝での霧氷

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「満州特異ノ景ニテ楊柳ニ附着シタル霜恰モ我国ノ桜花ヲ擬セシム。図ハ【文字欠】ニ於テ写シタルモノナリ。」とある。日記の明治38年1月15日に「本日雲霧最モ甚シクシテ、十間前ノ物ヲ見事能ハズ。冷氣ノ為メ草木ニ凍結シタル霧恰モ梅花ノ如ク凍ル。太陽之ニ光謝シタルトキハ一層之美觀ヲナセリ。」とある。木に附着したのが、写真解説では「霜」、日記では「霧」と異なるが、霧氷の現象である。恐らく、日記の1月15日に撮影したのであろう。



写真19 越冬した李家達連溝の村長一家

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「冬営シタル李家達連溝村長ノ一家」とある。惟芳は、戦争中ではあるが異国の地においての習俗に目を向けている点が興味深い。



写真20 李家達連溝における酒宴

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「滞在中ノ娯楽小宴ノ実況」とある。左端の人物が緒方惟芳本人。



写真21 李家達連溝における入浴

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「陣中之風呂」とある。



写真22 防寒用のわらじ

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「防寒のわらじ」とある。李家達連溝の越冬では、 $-10$ 度以下の日々が続いた。足先の凍傷防ぐために作ったものであろう。わらじの製作方法を紹介したものと考えられる。



写真23 李家達連溝付近の一般家屋

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「支那人ノ土中家屋前面」とある。当時の風俗を知るうえで興味深い。



写真24 李家達連溝での正月の餅つき

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「陣中正月ヲ賀サントシテ炊卒等ノ餅」とある。

おいて翌年の1月28日まで越冬をしている【写真18】。越冬は、12月11日に最低気温が-20度となり、食料の調達などに過酷を極めたが、11月3日の天長節の式典の後、「余興」として「球取」「二人三脚」などの今でいう運動会をし、夜には看護卒たちによる芝居などが行われた。李家達連溝に移動してからは「薪ノ木切」「近隣村への訪問」「運動」「酒宴」などをして生活を続けた【写真18・19・20・21・22・23】。11月21日に惟芳は遼陽まで買い物に行くことを命じられ、宿営地から煙台停車所まで歩き列車で遼陽まで往復している。また、明治37年1月1日に旅順陥落の報が入り、正月も重なり祝宴が行われた【写真24】。1月7日には、蓄音器で音楽を聴いている。

11月から1月にかけての越冬の寒さは過酷を極めたが、戦地における束の間の休息に過ぎなかった。

(3)黒溝台会戦・奉天会戦 明治38年1月25日に、日本軍は黒溝台方面にロシア軍の部隊が進行しつ

つあることの情報に接し、第五師団同月26日から28日に柳条口を攻撃することとなった。これは、来るべき奉天会戦の前哨戦でしかなかった(戦死200名、負傷者1275名)。

2月20日に日本軍は奉天への攻撃の命を各司令官に伝達した。日本軍の兵力は25万人に対し、ロシア軍の兵力は35万人とまさに総力戦の体制がとられた。第五師団は21日より出撃の準備を整え、25日以降順次出撃を開始した。3月1日より攻撃を開始し奉天を目指して北上を開始し、3月10日に奉天は陥落した。

惟芳たちの隊は、1月25日に出撃の準備にかかるが、26日に出撃は見送られた。28日午後4時に急遽出撃が発令され午後5時に李家達連溝を出発する。気温-16度の雪のなか午前3時に小煙台において露営をした。2月は、-20度の中で徐々に行軍と露営を続けて前進を続けた。

3月1日には前線の三丈子に到着し衛生第一中隊と交代するはずであったが、ロシア軍の砲弾にさらされ退却し、古城子に野戦病院を開設し



た。日没から明朝までに1000名の負傷兵の収容を行った。惟芳は長瀬看護長のもとで200名収容を行っている。翌2日は、収容した負傷兵の看護にあたった。同3日の日記には何の記述もない。この日は看護に全力を尽くし、日記を書く暇もなかったものと考えられる。4日には、負傷兵を後方の病院へ移す「説」が流れ、「非情ノ煩雜」をきたしている。5日の正午には第六師団の衛生予備兵に患者は引き渡され、惟芳たちに前進の命令



写真25 ロシア軍兵士の頭蓋骨

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「黒溝台戦役ニ於テ頭部ニ銃砲創ニヨリ倒レタル露兵ノ頭骨」とある。骨は砕けた部分を針金状のもので復原している。写真1枚目に「c」、写真3枚目に「e」の記号が付され、頭蓋骨に番号が付されている。近代兵器の発達による破壊力を示している。医学的な見地から撮影されたものであろう。

が下された。6日には、崔家堡に野戦病院を開設した【写真25・26・27】。この崔家堡病院は、この地より北方に野戦病院開設した時に収容した将校たちの病院で、その人数は983名であった。同8日には、崔家堡病院の患者160名を後方に転送している。同11日正午に崔家堡病院を第四師団衛生病院に引き継いだ。3月6日に崔家堡病院を引き継いだ後、日記の3月7日、9日、10日の記載はなく、この間はこれまでの看護活動で最も困難な日々であったことがわかる。3月10日には奉天は陥落したが、惟芳らは休息することもなく、3月11日の午後には前進を開始する。14日には死体の検査、15日には死体の片づけを行っている。16日から18日まで、22日から25日までの日記の記載はない。恐らくは、戦死者の処理に追われて日記を書く暇もなかったものと思われる。ようやく惟芳らが休息したのは、3月27日のことであった。3月28日には前進し、30日に崔家堡に舎営病院を開設する。翌31日の患者は、中島中佐1名だけであった。



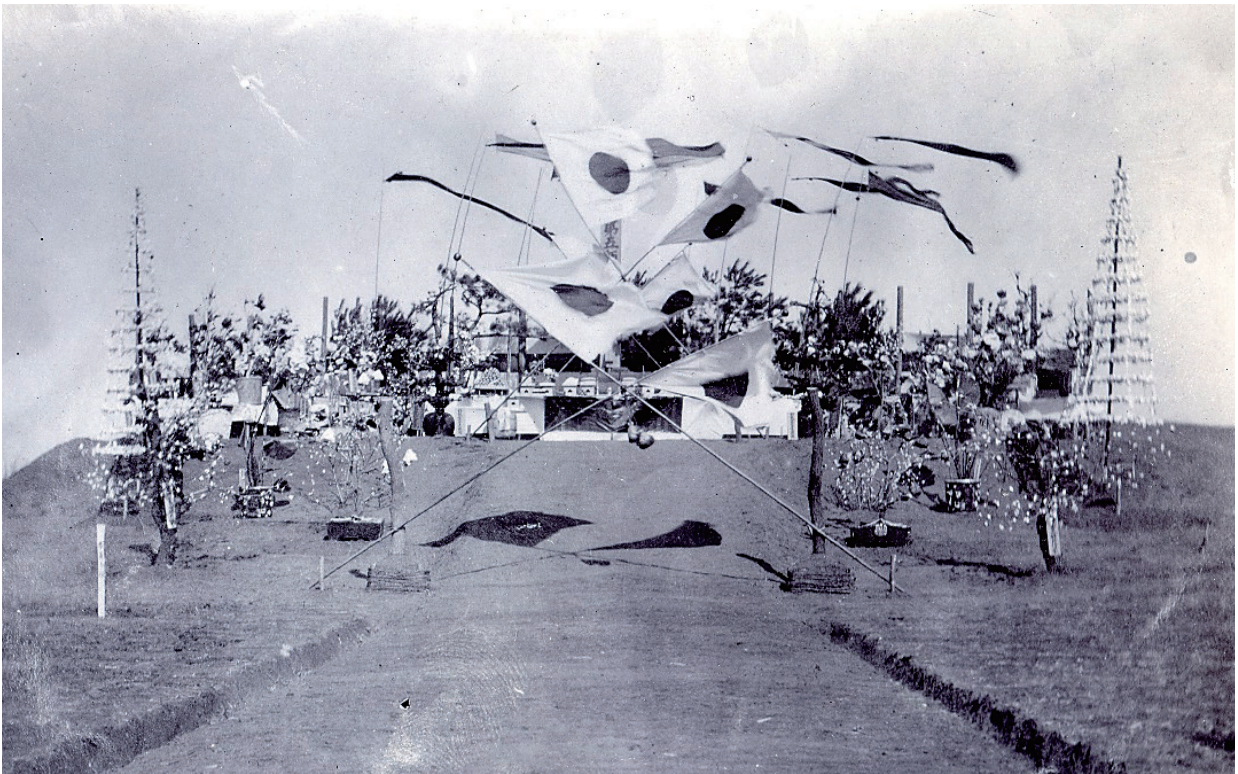
写真26 崔家堡野戦病院

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「崔家堡野戦病院ノ発着全面」とある。明治38年3月6日から11日奉天会戦における負傷兵を収容し、後方へと搬送をおこなった。入口には手術着姿の看護兵が立ち、右には日の丸の旗、右に赤十字の旗が掲げられている。



**写真27 寺院を利用した崔家堡野戦病院の将校用の病棟**

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「奉天戦役ノ際開設シタル奉天南方約五里ナル崔家堡野戦病院ニシテ寺院ヲ代用シタル将校病舎」とある。全面中央に立札がたっている。入口には馬2頭が繋がれている。



**写真28 奉天会戦における第五師団の招魂祭祭壇**

※写真の裏には記載はない。写真の解説には「奉天会戦終ルヤ第五師団ノ最モ苦戦シタル坊柁子ニ於テ施行シタル招魂祭壇」とある。

第五師団の奉天会戦における戦死者は1430名、負傷者4395名に達した【写真28】。看護兵であった緒方惟芳にとって、極めて過酷な看護活動の日々を送った奉天会戦であった。

### おわりにかえて

本論では、看護兵であった緒方惟芳が毎日書き続けた「日露戦争従軍日記一」を中心に明治37年8月29日に広島宇品港より出発、明治38年3月10日に奉天会戦が終了し、3月31日までを対象に看護兵としての活動を検討した。また、惟芳が撮影したと考えられる「写真」によって、惟芳自身の見た日露戦争の実態を我々は目にすることができる。さらに、惟芳の「軍隊手帳」で彼の軍隊経歴の全貌を知るうえで重要な情報を得ることができた。

本論で紹介した明治38年3月31日以降、惟芳

の「軍隊手帳」によると5月2日まで崔家堡舎営病院で勤務し、7月30日より10月7日まで「南峇舎営病院」で看護活動を行い、ようやく同年12月27日鉄嶺で列車に乗り、同月30日に大連乗船し、翌年の明治39年1月3日宇品上陸している。周知のように明治38年に9月5日にアメリカ合衆国のポーツマスで日露戦争の講和条約が結ばれた後も、第五師団（満州軍）は北上を続け戦闘および駐留が続いた。

本論に続く「陸軍看護兵『緒方惟芳』の日露戦争(2)」では、惟芳が日露戦争から帰還して「広島衛戍病院」で看護兵を続け、医者へとなるまでの史料を紹介することとしたい。また、あわせて日露戦争と惟芳の従軍したコースや宿营地や野戦病院などの図も掲載する。さらに、兵士として記録した「従軍日記」や「写真」の性格や、記憶としての従軍の証言などについては別稿にしたい。

---

### 【史料】

#### 一、「軍隊手帳」【記部分を抜粋。ゴシックは軍隊手帳の項目】

**所管** 第五師団

**部隊號** 広島衛戍病院

**兵科** 衛生部

**官等級** 一等看護長

**本貫族** 山口県士族

**氏名** 緒方惟芳

**誕生** 明治拾六年参月拾九日生

**特業** 看護術

**住所** 山口縣長門国阿武郡萩町大字堀内四百壺番地

**兵役** 現 **服役年期** 三ケ年 **自**【明治】三十六年十二月十五日 **至**三十九年十一月三十一日

**實役** **自**三十六年十二月一日 **至**三十九年十一月三十日

**兵役** 再服役 **服役年期** 六ケ年 **自**三十九年十二月一日 **至**四十五年十一月三十一日

**實役** **自**三十九年十二月一日 **至**大正元年十一月三十日

**摘要** 大正元年十一月三十日現役満期、十二月一日後備役編入

**褒章** 明治三十九年四月一日、三十七・八年戦役ノ功ニ依リ勲八等白色桐葉章及金貳百円並ニ従軍記章下賜。

**善行証書** 大正元年十一月二十九日、善行証書附典。

**適任証書** 大正元年十一月二十九日衛生部士官軍医勤務適任証書附典。

**履歴** 明治三十六年十二月十五日第一中隊へ編入。三十七年四月十九日五月八日看護学修業ヲ命セラル。同年八月八日看護学卒業。同年八月二十八日工兵一等卒。同年同月同日看護手申付。同年八月二十八日歩兵第十一聯隊補充大隊へ転出。第五師団野戦病院附トシテ、同年八月二十九日宇品港出帆。明治三十七年九月二日清国盛享着。南尖上陸。大狐山、岫巖、折木山、海城ヲ経テ、同月十六日「タイエルトン」着。同日第五師団第四野戦病院ニ編入。同年同月同日ヨリ同二十四日迄「タイエルトン」ニ於テ野戦病

院ノ業務ニ従事。十月九日ヨリ十五日迄沙河附近ノ戦闘ニ参与。十月二十三日ヨリ二十九日迄「モンヅアン」ニ於テ患者療養所ノ業務ニ従事ス。十月二十九日ヨリ三十日迄、新庄ニ於テ野戦病院ノ業務ニ従事ス。明治三十八年一月二十七日ヨリ同二十九日迄、黒溝台付近ノ会戦ニ参与。同年二月下旬ヨリ三月中旬迄奉天付近ノ会戦ニ際シ、三月一日ヨリ同五日迄古城子ニ於テ野戦病院ノ業務ニ従事。同月六日ヨリ同十日迄崔家堡ニ於テ、野戦病院ノ業務ニ従事。同年三月三十日ヨリ五月二日迄崔家堡ニ於テ舍営病院ノ業務ニ従事。同年七月三十日ヨリ同年十月七日迄、南峯ニ於テ舍営病院ノ業務ニ従事。同年十月十五日付、任三等看護長、同日第四野戦病院附。同年十二月二十七日鉄嶺乗車。同年同月三十日大連乗船。明治三十九年一月三日宇品上陸。同年同月六日解隊。同日廣島豫備病院附。二月十二日残務結了着任。同年四月一日、三十七・八年戦争ノ功ニヨリ勲八等白色桐葉章及金二百円並ニ従軍記章。明治三十九年四月三十日金三十銭酒餞料下賜。三十九年九月二十九日復員下令。同年十一月一日任準【准】二等官【看】護長。同年十二月三日廣島衛戍病院へ仮編入。同年十二月一日廣島衛戍病院附。四十年五月一日給三等給。同年十二月一日給二等給。四十一年六月十五日給一等給。同年十一月五日任準一等看護長、四十四年二月二十八日二等給。大正元年十一月一日伎倆証明書附与。十一月三十日現役満期。十二月一日後備役編入。大正二年簡閲點呼執行済。大正四年簡閲點呼執行済。大正五年七月十一日丙種勤務演習ノ為メ、歩兵第七十一聯隊第二中隊へ招集。同年同月二十五日召集解除。大正六年簡閲點呼執行済。大正七年簡閲點呼執行済。大正八年簡閲點呼執行済。大正九年簡閲點呼執行済。大正十年簡閲點呼執行済。

## 二、「日露戦争従軍日記 第一冊」

### 【表紙】

日進

### 【目次】

上陸ヨリ遼陽ニ向フ。

南尖 7.5 大孤山 4.5 土城子 6 小湾溝 6.5  
岫巖 7.5 王家堡子 5 小孤山 4 折木城 6.5  
海城 7 太屯 7 七苓子 8 遼陽

沙河戦闘ニ向フ

大楽屯 南八里庄 新家屯 遼陽北門外  
菲菜園子 瀾泥錨 大營官地 銀近堡子  
山家子 周漢屯 東山溝東河ノ東二里半  
双太子 李堅子 新庄 周漢屯 下台子  
李家達連溝

黒溝台附近戦闘ニ向フ

小煙台 狼洞溝 徐家台 曹家寓排

奉天附近会戦ニ向フ

古城子 新台子 崔家堡 大榆樹林 新台子  
崔家堡

八月二十八日 日 晴

午後五時命降ル。被服返納、工兵第五大隊ヲ出ツ。午後八時半歩十一聯隊ニ。夜外出。

八月二十九日 月 晴

午前十時、歩十一聯隊出。正午前宇品着。午後

三時乗艦（若狭丸）。午後三時半出帆。

八月三十日 火 晴

午前六時下関港着。石炭・糧食積込。午後三時頃出帆。玄界ニ向テヨリ風波アリ。

八月三十一日 水 晴

朝鮮海島嶼多ク風波ナシ。支那海ニ向ヒ島少ク、夕刻ヨリ海上見エル島ナシ。風波ナシ。

九月一日 木 晴

前日同様島ナシ。夕刻前ヨリ遠クニ嶋ヲ見ル。午後六時頃南尖海着。風波ノ為メ上陸ヲ留ム。

九月二日 金 半晴曇

早朝ヨリ上陸準備。午前十時半南尖上陸。港甚。所感。支那人。午前十一時ヨリ食事終テ行軍。一ノ山ナク波形ノキビ畑ノミ。午後八時太孤山着。十一時宿泊。食スルナシ。

九月三日 土 晴

滞在。市中。風呂。

九月四日 日 半晴曇

午前六時半出発。重荷道中困難。多少ノ山路。午後一時半土城子着。人家十戸余。民家宿泊。

九月五日 月 晴 出発・倒着前雨

午前七時半出発。山路、内地ト同感。古戰場ヲ見、午後四時、小湾溝着。人家十戸以下。河辺ニ野營。寒氣甚シ。進ムニ従テ物価高。

九月六日 火 晴

午前六時半出発。畑路、山路（二峠）。午後三

時岫巖着。愈々遼陽陥落ヲ開ク為ニ相撲。市中太孤山ニ憂ル。

九月七日 水 晴  
滞在。洗。

九月八日 木 晴  
午前二時少雨。午前六時半出発。土地前日同様。  
午後三時半王家堡子着。民家宿。古戰場。

九月九日 金 晴  
午前六時半出発。土地前日同様内地ノ如ク。只山ニ木少ク、河多クシテ浅也。午後一時半小狐山着。路中古戰場。民家宿。

九月十日 土 晴  
午前六時半出発。土地前日同様。午後一時折木城着。宿難、民家。

九月十一日 日 晴夕至雨  
午前六時半出発。道中始メ前日同様、後広野トナル。午前三時半海城着。

九月十二日 月 晴  
本日滞在。午後城壁内ニ入ル。市中稍々整頓。前行軍中第一。

九月十三日 火 晴  
午前七時半出発。鉄道線路行軍。午後四時半太屯着。宿泊。

九月十四日 水 晴  
午前七時出発。山間畑地。午後二時半頃七岑子着。戦傷患者多。野宿。

九月十五日 木 曇  
午前九時出発。土地前日同様。目的地大楽屯着ノ所、遼陽ニ至ルベシトシテ直ニ向フ。路中道ニ迷フ。午後七時頃遼陽ノ東門前第五師団司令部着。砲兵陣地固。戦死者墓。人馬死。砲弾跡。人家宿。

九月十六日 金 晴  
午前十一時頃発。南八里庄、第四野戦病院ニ向フ。土地不明。所在不明。午後四時半大楽屯、第四野戦病院着。本部宿。

九月十七日 土 曇  
江口看護長下、第四、五、九病室事務附。

九月十八日 日 雨寒  
患者三十名 潘家垆戦地定立病院へ転送ノ命ヲ受ケ、看護卒三名ト共ニ無事転医。日没前帰着。帰りテ人員異。

九月十九日 月 半晴曇寒

患者、入・退混雑。

九月二十日 火 曇寒  
丸山看護長下一・二号附ト交換セラル。一名死。

九月二十一日 水 曇雨  
侍従武官患者慰問ノ為メ来ルヲ以テ大掃除ス。

九月二十二日 木 晴  
前日同様。

九月二十三日 金 晴  
午前九時頃伊藤侍従武官及高階侍医及軍医部等数名、患者慰問トシテ来リ。陛下ヨリノ御菓子料ヲ賜フ（戦傷患者【】脱カ）。

九月二十四日 土 晴  
午後三時頃第十師団衛生予備員ニ患者引継ヲ為シ、直ニ南八里庄ニ向ヒ宿営ス。

九月二十五日 日 晴  
本日宿営終日休ム。夜間、明日出発スルノ命降ル。日没時刻ニ至リ事務官人員ヲ集メ、遼陽陥落ニ付、陛下ヨリノ詔語及過日ノ侍従武官ノ講評ヲ伝ヘラル。

九月二十六日 月 晴  
午後二時頃ヨリ新家屯（南八里庄ヨリ西南南二里余ノ所）ニ向フ。路中鞍部ヲ通過ス。此地ハ、露国ノ防御工事ノアリシ所ニシテ、其麓ニハ土穴・鉄条網等ヲ以テ固メアリシモ、終ニ我軍ノ占領スル所トナル。此所露国軍人ノ屍ノ腐敗ノ為メ臭気甚シ。五時頃目的地ナル新家屯ニ着ス。

九月二十七日 火 晴  
風呂。終日休。

九月二十八日 水 晴  
午前休ミ。昼食後ヨリ前々日通行ノ鞍部前（ ）【（）内文字欠】第二病隊ノ所ニ至リ、看護卒一名ト共ニ恤兵部ヨリノ寄送品ヲ受ケ帰ル。午後配。

九月二十九日 木 曇 風アリ後雨  
終日家ニ在リテ休ム。就中豚捕トシテ運動ヲ試ム。

九月三十日 金 晴  
終日家ニ在リテ新聞ヲ読了。

十月一日 土 晴  
午前十時頃ヨリ大楽屯集活司令部ニ至リ、荷物混包ノ取調ニ向フ。事終リテ午後六時頃帰路中彼我ノ砲兵陣地及敵弾痕跡、兵・馬、死ト死。

十月二日 日 晴

終日家ニ在リテ休ム。風呂。

十月三日 月 曇 寒甚

午後三時迄ニ終ルベキ清潔検査施行。終日家ニ在リ。夕食後運動。

十月四日 火 半曇

寒甚シクシテ日出時ニテ摂氏一度トナル。終日家ニ在リ休ム。

十月五日 水 晴

寒気尚ホ前日ト同シク甚シ。終日家ニ在リ休ム。

十月六日 木 晴

本日無異。

十月七日 金 曇

本日、冷風甚シクシテ、寒甚シ。少々感冒ニ罹リ、寒気ニ苦ム。本日防寒用被服給与。

十月八日 土 晴

本日ハ前日ニ異リテ天晴レ、暖和ヲ覚ユ。午前中ニ於テ、豚追ヲナシテ大武者ヲ捕フ。見習薬劑官小川氏就職ニ付テ、看護手一同ニ与ヘラレタル麦酒ヲ、宿舍ノ後方高地ニテ宴ス。

十月九日 日 曇

本日天気曇リテ風甚シ。午前十時頃ヨリ中田計五入院ノ為メ護送シテ大楽屯定立病院ヘ向フ。少々風邪ノ為メ苦難。午後三時頃帰着ス。

十月十日 月 晴

午前八時頃ヨリ直チニ出発ノ令降ル。其後隙アリテ早ク昼食ヲ終リ、遼陽ノ南門外「ラマイワレ」ニ向フ筈ノ所、路中命ト異リテ、遼陽南門ヨリ入りテ直チニ北門ニ向フ。日没ニ至ルモ命定マラズ為メニ、北門外ニテ止ル事三時間余ニシテ、午後九時頃近傍ニ宿営スル事ト定ル。然レトモ彼所、是所ニ命ヲ受テ帰ラザル者ニ向テ、歩哨トシテノ命ヲ受ケ、看護卒四名ト共ニ向フ。不幸ニシテ二名（嵯峨田、福島）尚ホ帰ラザルヲ以テ、終ニ翌日マテ見張ス。

十月十一日 火 晴

午前七時頃前日ノ二名帰ル。午前八時出発シ東北方ニ向テ進む。一里ニテ鉄橋アリ。其側ニ工兵隊架設ノ軍橋アリ。其所ニ於テ、工兵五大隊ノ中川上等兵、名藤井、其他ノ兵ニ出会フ。一話ノ結果、松原看護手ハ病氣ノ為メ帰国ノ由。線路沿ヒ行ク事一里半ニテ命ヲ待ツ。待命中昼食ヲ終リ、午後四時頃後方ニ向ヒ、蕪菜園子ニ宿営ス。本日ハ車監視トシテ来ル。本

日ハ前日来、疾ヲ冒シタル為メ、疾甚シテ診断ヲ受ク。

十月十二日 水 曇

午前八時出発。行軍三里余シテ、午前十一時潤泥鋪ニ至リ命ヲ待チ、午後六時同地ニ宿営ス。

十月十三日 木 雨

午前六時半出発。東方向ヒ進む事十五・六丁ニシテ畑中ニテ命ヲ待ツ。午前九時頃。午後六時頃荒地ニ宿営スノ命アリテ畑中ニテ夕食ス。砲声天地ニ響キテ簣ハレリ。其宿営セントスル所、命令ハ元ヘトナリテ、直チニ東南方ニ向ヒ約二里ノ行軍ニテ、午後九時大営官屯ニ至リ□ヲ以テ、軽休露營セリ。本日午前カラ数回マテモ敵ノ軽球昇ル。要スルニ本日ハ第五師団第一軍ニ加フ為ト云フ。

十月十四日 金 雨

午前六時出発準備ヲ為シ命ヲ待ツ。正午其近傍ノ村邑ニ向フ。昼食ヲ為シ、午後一時命令受領出発。東方ニ向テ進む事五里ニテ、路中大雷雨降り、身体総ヌレトナル。日没ニ銀匠堡子ニ宿営ス。本日松永旅団ノ命令ノ下ニ開設スベキ筈ナリシモ、患者少数ノ為メ開設セス。砲声ハ打続キ、非常ニ近傍ニテ小銃弾ノ一声射撃、近々トシテ聞ユ。路中露二名戦死体アリ。我軍馬ノ路ニタマルモ数知ラズ。本日ハ前々日来ノ風邪ノ為メ、非常ニ困難ニテ宿営スヤ、大火ヲ以テ数時間身体及衣服ヲカワカス。

十月十五日 土 曇

本日日出ヨリ出発ノ準備ヲナシタレトモ、滞在ノ模様ナリシニ、日ノ正ニ没セントス中、故アリテ夜行軍ヲ為シ、三里半ノ行程ヲ経テ、十二時頃山家子ニ着、露營（但、幸ニシテ宿営）ス。道路ハ前日行軍シル所。

十月十六日 日 晴

午前六時起床。直チニ食事ノ後出発ヲナシ、途中露国将校以下四名ノ捕虜ニ出会ヒ、正午【2文字を消す】地ニ至リ命ヲ待ツ。砲声尚ホ連々トシテ烈シ、午後五時頃一里許リ西北方ノ周漢屯ニ至リ宿営ス。

十月十七日 月 曇

午前八時出発準備。午後三時半頃ヨリ東北方ニ向テ約二里半ノ行軍ノ後、東山溝ニ着。第十師団司令部ノ命ヲ待チ、此所ニテ露營ス。夜半ニ

シテ雨降り大ニ困難ス。夜襲アリ。

十月十八日 火 雨

昨夜来ノ雨尚ホ止マズ。天明ノ頃出テ、半里程西方ノ双台子ニ至リ命ヲ待チ宿營ス。夜襲ノ用意。無効。

十月十九日 水 曇

本日終日命ヲ待チ終ニ宿營ス。夜二時半頃敵襲アリテ用意ス。

十月二十日 木 曇

本日午前七時ヨリ出テ、西方西双台子ニ至リ命ヲ待ツ。午後五時頃ヨリ西方一里程リノ新庄ニ至ル。此所第六師団野戦病院アリテ、此地ニ至リ舎營ス。

十月二十一日 金 晴

前来ノ病気尚ホ全快セズ。終日家ニ在テ滞在ス。

十月二十二日 土 晴

本日前日同様無異。

十月二十三日 日 晴

本日風烈シクシテ、午前八時頃ヨリ患者療養所ヲ開タレトモ、病症尚ホ快セズシテ、一ノ休養室ヲ設ケ、其所ニテ休養シタレトモ、午後五時頃診断ノ際患者多数入院セルガ為メ勤務ニ就クベキ命セラレ、食後七時頃檜高看護長ト第四・五号附トナル後ニテ、患者入院シ明日ハ転送スルノ有様ヲ以テ、一時頃迄勤務ノ後寝ス。

十月二十四日 月 晴

本日患者四十名ヲ煙台定立病院（第五師団）ニ転送ノ命ヲ受ケ、看護卒四名、輜重輸送卒三名ト共ニ出発シ、午後零時四十分無事患者ヲ引渡シ、同五時頃帰着ス。煙台ハ当地ヨリ南方三里余ノ地ニアリ。病症尚ホ治セズ。歯痛並ニ下痢ノ為メ大ニ困難ス。

十月二十五日 火 晴

本日患者ノ入退アリ。同シク煙台ニ転送セリ。病症前日同様。殊ニ歯痛甚シキ為メ終日結麗阿曹トヲ入ル。

十月二十六年 水 晴

本日前日同様無異。但、歯痛ハ少シク止ヨリナレトモ、下痢殊ニ便秘、半下腹塊ヲ生シ難セリ。

十月二十七日 木 曇

本日無異。同ジク病院勤むヲ服ス。

十月二十八日 金 曇

本日前日同様。

十月二十九日 土 晴

本日患者療養所ヲ閉鎖シ、野戦病院ヲ開ク。同時ニ午後ヨリ第七号病室ヲ開キ之ニ向フ。

十月三十日 日 曇

本日午前十時頃第一野戦病院ニ引続き、直二十里河ニ向ヒ命ヲ受ケ、昼食ノ後直ニ周漢屯ニ向フ。総計二里余、午後二時頃着。夜八時開【1字欠】ノ際、明日出発ノ命降ル。又本日周漢屯着ノ際第二病体【隊カ】ニ編入サル。

十月三十一日 月 晴

本日午前九時ヨリ周漢屯ヲ出テ、南方二里余ノ地ニ向ヒ、正午目的地タル下台子ニ着ス。本屯ハ一寒村ニシテ万物不自由ニシテ、近傍ニ運動シテ必要品ヲ徴發ス。

十一月一日 火 曇

本日午前十時頃本部前ニ集合シ、満州軍ニ賜リタル詔語ヲ奉読、並ニ看護手及衛生隊ノ二卒ニ、総司令官ヨリノ感状ヲ読シ、同時ニ来ル三日ノ天長節ノ祝賀ニ就テ一言サル。其レヨリ宿舎ニ就キ、天長節余興ニ付テ計ル。

十一月二日 水 晴

本日無異状。只天長節ノ余興ヲ計ル。

十一月三日 木 晴

本日天晴レ、一天ノ雲ナシ。午前九時頃、一同式場ニ集合シ、君カ代ヲ三称シ、次デ天皇陛下ノ萬歳を称へ【2字欠】ヲ上げ、【次の行の短歌が挿入されている】

思ひきや敵に祝砲打たせつつ君が千とせを祝ふべしとは

後、余興ニ向ヒ、早駟・二人三脚・盲目旗取ヲナシ、次テ式場ニテ昼食ヲナシ、午後ヨリ球取・武装競争・旗渡及角力ヲナシ一同開散シ、夜ニ入り看護卒有志集リ芝居ヲ為ス。

十一月四日 金 晴

本日前夜芝居ノ際、花開キヲ為シタルニヨリ、花主ヲ呼デー会ヲ為シ日没ニシテ終ル。実ニ戦地ニ在リ、然モ彼ノ敵国ヨリ占領シタル満州ニ於テ愉快ニ天長節ヲ祝シタルヲ大ニ賀ス。

十一月五日 土 半晴曇

本日ハ前日ニ引キ代ヘ天風寒ク、初雪ヲ觀メテ、朝食ス。

十一月六日 月 晴

本日終日家ニ在リテ、無異状。

十一月七日 月 晴

本日昼食終リテヨリ直チニ線路ヲコヘテ、南方二十町許ノ李家達連溝ニ転営ス。本村ハ前村ニ比シテハ、非常ニ家屋宜シキモ、水ニ不便ナリキ。

十一月八日 火 晴

本日無異。

十一月九日 水 晴

本日炭薪ノ木切ヲ命ゼラル。

十一月十日 木 晴

本日酒ヲ給セラル。飲後東方隣村ニ至リ、支那人ノ店ニ至リ一話ヲ為シ帰ル。

十一月十一日 金 晴

本日補充トシテ橋本手来ル。昨ノ隣村ニ至リ酒ヲ求ム。

十一月十二日 土 曇

本日天気曇ニシテ、寒甚シ後雨トナル。雨前北方線路監視所ノ在ル、我軍ノ防禦工事ヲ視ル。其所ニテ△。

十一月十三日 日 半曇

本日昼食後ヨリ運動トシテ村落ヲ遊ブ。帰りテ入浴ス。

十一月十四日 月 曇

本日昼食後ヨリ一同連レテ、南方隣村ニ至リ犬打ヲ為ス。寒甚シクシテ池沼の水、人ヲ乗ス。

十一月十五日 火 曇

本日寒気甚シクテ降雪アリ。橋本手ト共ニ木切ノ監ヲ命ゼラル。

十一月十六日 水 晴

本日一般ノ清潔検査ヲ行フ為メニ、室ノ内外ヲ掃除ス。入浴。枯木切ノ運動。本夜カラ夜循ヲ行フ。

十一月十七日 木 晴

昨夜馬賊ト疑ハシキモノ、我村ニ来ルト支那人告グ為メニ、本日午前二時頃ヨリ後、歩兵守備ニ来ル。然レドモ、無異ヲ以テ正午頃帰ル。運動トシテ橋本ト共ニ本村ヲ遊家ス。本日夕刻ヨリ日直並ニ火災防禦視循ヲ受ク。

十一月十八日 金 晴

本日日直。天気暖クシテ氷ノ一部ヲ解ク。洗濯ヲ行フ。日直ノ為メ、終日家ニ在リ日々休養室ヲ見舞フ。

十一月十九日 土 半曇

本日終日家ニ在リ。考科表ヲ調査ス。夕刻入浴。他無異。

十一月二十日 月 晴

本日曇ナレトモ多小暖ナリ。防寒トシテノ被服ニ付注意ス。

十一月二十一日 月 晴

本日遼陽ニ買物ノ為メ出張ヲ命セラル。午前三時、床ヲ出デテ準備ニ掛リ、同五時ヨリ宿舍ヲ以テ、煙台停車場ニ向テ鉄道線路ヲ歩ミ、七時四十分同地ニ着。八時二十分ノ列車ニテ発。九時二十分遼陽ニ着ス。防寒具ヲ用ヒタレトモ、寒氣ノ為メ手足ノ痛ヲ覚ユ。直ニ城壁内ニ入り受命ノ買物ヲ為シ、市中を縦横ニ歩ミ、午後二時頃停車場ニ至リ、三時二十分ノ列車ニテ煙台ニ向ヒ、四時二十分着。直ニ輜重車輛ニテ宿舍ニ帰りタルトキハ、日没後一時間ナリ。本日ノ遼陽行ハ、天気好良ナレドモ、汽車内ニアリテハ実ニ寒氣ヲ覚ユ。又長時間ノ歩行ノ為メ足痛ヲ覚エタレトモ、羅馬塔ノ如キ停車場ノ如キハ、遼陽ニテ会テ見サル所ニテ、実ニ愉快ナリ。

十一月二十二日 火 晴

本日本切ノ命ヲ受ケ之ニ従事ス。

十一月二十三日 水 晴

本日夜循他家ニ在リテ、無異。

十一月二十四日 木 晴

本日本切ノ総員掛トナリ、吾モ之ニ従フ。終日之ニ従事ス。他無異。

十一月二十五日 金 曇雪

本日前日同様、木切ノ勤むニ従事ス。昼食後ヨリ雪片々トシテ、終ニ銀世界トナスニ至ル為メニ午後ヨリ休憩トナル。本日煙草二十本ヲ給与ス。

十一月二十一日 土 晴

本日天晴レトモ、前日来ノ雪尚ホ溶ケズ、銀世界ヲ為ス。同ジク木切ニ従事ス。早朝ヨリ村邑ノ東端ノ一家ニ入り、粉末ヲ作ラシメ、満仲【饅頭】ヲ作ル。

十一月二十七日 日 晴

本日天晴レ、終ニ一面ノ銀モ次第ニ地面ヲ出スニ至ル。

十一月二十八日 月 晴

本日前日同ジク木切勤むヲナス。

十一月二十九日 火 晴



本日無異。  
十一月三十日 水 晴  
本日無異。  
十二月一日 木 晴  
十二月二日 金 晴  
十二月三日 土 晴  
十二月四日 日 半晴曇  
本日午前中暖ニシテ、午後ヨリ冷トナル。本日同ジク木切ヲ為ス。  
十二月五日 月 晴  
本日寒氣最モ甚シ。終日家ニ在リ休養ス。  
十二月六日 火 曇晴  
本日稍々暖ニシテ風ナシ。入浴ス。終日休養ス。  
十二月七日 水 曇  
本日寒氣烈ニシテ、昨夜来ノ小雪ヲ積ム。本日終日家ニ在リ。  
十二月八日 木 晴  
本日寒ナレトモ、昨日ノ雪トケ、風ナクシテ前日ニ比シ暖ナリ。室内外ノ大掃除ヲナス。  
十二月九日 金 雪  
本日寒強クシテ雪降。二・三寸アリ終日家ニ在リ。  
十二月十日 土 晴  
本日尚ホ冷シテ、前日来ノ雪依然タリ。無異。  
十二月十一日 日 - 20 晴  
本日寒氣最モ烈シクシテ、零下二十度ニ降ル。寒度甚シクシテ鼻水凍リ手ニツク。水氷ル。終日家ニ在。夕食後ヨリ、村辺ヲ散歩ス。其寒甚シ。  
十二月十二日 月 - 18 晴  
本日昨日ニ比シテ暖ナレトモ、尚ホ十八度ヲ下ル。終日家ニ在リ。午後ヨリ風呂場ノ位置、変更ヲナス。  
十二月十三日 火 - 18 晴  
本日寒氣昨日ト等シ。終日家ニ在リテ休養ス。天候寒ナルカナ。夜半ヨリ遼陽買物トシテ向ヒタル一行ハ、煙台ニテ機関車ノ凍結ノ為メ目的ヲ達セズシテ帰ル。終日家ニ在リ。  
十二月十四日 水 - 17 晴  
本日寒風等シクテ風穏ナリ。終日家ニ在リ。午後ヨリ橋本氏ト協力シテ、二ヶ分隊ヲ以テ風呂ヲ家内ニ設ク。  
十二月十五日 木 - 5 半曇  
本日曇ニシテ小暖ナリ。午前中伍【碁】ヲナシ

居リシガ、午後ヨリ倉舗氏来リ。昨年ノ本日入隊シタリタル思ヲ以テ、橋本分隊ト共ニ愉快ニ酒宴ヲ開ク。酒保ナクシテ酒ニ欠乏ス。幸ニシテ下給酒アリテ、大ニ仕合ス。飲最モ極メ愉快ヲ尽セリ。  
十二月十六日 金 - 10 晴  
本日終日家ニ在リテ伍【碁】ヲ遊ブ。夜ニ入り酒会ヒ、セケン話ヲ遊ブ。他異ナシ。  
十二月十七日 土 - 18 晴  
本日又少シク寒氣ヲ増ス。前日同様家ニ在リテ伍【碁】ヲ遊ブ。  
十二月十八日 日 晴  
十二月十九日 月 同  
十二月二十日 火 同  
十二月二十一日 水 同  
十二月二十二日 木 同  
本日迄無異。気温ホゞ同ジ。  
十二月二十三日 金 - 14 晴  
本日前日同様終日家ニ在リ。午後ヨリ日直勤務ニ従フ。恤兵品及下給品ノ分配アリ。  
十二月二十四日 土 - 16 晴  
本日同様。午後ヨリ坪田軍医衛生講話ヲ行フ。  
十二月二十五日 日 - 10 晴  
本日終日家ニ在リ。無異。  
十二月二十六日 月 - 10 晴  
本日午後ヨリ清潔検査ヲ行フ（トモ）、他無異。  
十二月二十七日 火 - 8 晴  
本日倉舗氏来ル。午後ヨリゼンザイヲ為シ満腹。夕食後ヨリ四分隊ニ至ル。  
十二月二十八日 水 晴  
十二月二十九日 木 晴  
本日午後ヨリ日直トナル。下給品、酒及靴・足袋ノ恤兵品ヲ分配ス。  
十二月三十日 金 晴  
十二月三十一日 土 晴  
本日ヲ以テ愈々本年ヲ終ル。明年之新シキヲ向ヘント松竹ヲ立ツル用意ス。並ニ新年トシテ下給品ヲ分配ス。戦地ニ於テ愉快ニ本年ヲ送ル。  
明治三十八年  
一月元旦 日 晴  
午前八時床ヲ出テ祝賀ノ盃ヲ上ゲ、正月之規定ノぞーにを食フ。本年ハ戦地之為メ祝賀式ヲ略シ、分隊上官代表シテ礼ヲナス。本日ハ愉快ニ

モ、我国ノ頭ヲハナレザル旅順口ヲ降服セシム。  
一月二日 月 晴  
本日午後迄家ニ在リテ愉快ニ遊ブ。午後四時頃、  
旅順降服ノ報ヲ聞クヤ酒ヲ買テ大ニ祝ス。日没  
ヨリ軍医・看護長全部我分隊ニ来リ、共ニ大ニ  
陥落ヲ祝セリ。其勢出征来ノ初メナリト云フ。  
一月三日 火 晴  
本日午前中家ニ在リ、午後ヨリ捕犬ヲナス。夕  
刻ヨリ寺尾分隊ニ至ル。夜ニ入り、父ヨリ来ル  
信書ヲ見テ古キヲ思ヒ悲□ル大トナル。  
一月四日 水 晴  
午前午後ヨリ清潔検査ヲ行フ。又午後ヨリ日直  
トナル。  
一月五日 木 晴  
本日戦地ニ於テ新年宴会ヲ開ク。酒盛ニトテ、  
支那車輛ニ卧シテ寒ヲ取ル。  
一月七日 土 晴  
本日午前十時頃梯隊ヨリ軍曹来リ。蓄音器ヲ持  
来リ、正午迄吾宿舍ニテ音楽ヲ為ス。内地ニテ  
ハ蓄音器ハ何ノソノ、然レドモ戦地ニテ是ノ如  
キ音ヲ聞クヤ内地ヲ思ハシム。  
一月六日 金 晴  
本日正午ニ於テぼたもちヲ作ル。内地ヲ発シテ  
ヨリノ初物ナリ。然レドモ為ニ暖爐熟シテ毛布  
二枚焼ク。  
一月八日 日 晴  
本日陸軍初メノ祝日ヲ以テ、加給品ノ酒ヲ分配  
セラル。  
一月九日 月 晴  
本日午後ヨリ、室内外ノ清潔検査ヲ施行ス。本  
日ヨリ帝国憲法学ヲ学ブ。  
一月十日 火 晴  
本日午後ヨリ日直トナル。終日家ニ在リ。  
一月十一日 水 晴  
本日無異。  
一月十二日 木 晴  
一月十五日 日 霧  
本日雲霧最モ甚シクシテ、十間前ノ物ヲ見事能  
ハズ。冷氣ノ為メ草木ニ凍結シタル霧恰モ梅花  
ノ如ク凍ル。太陽之ニ光謝シタルトキハ一層之  
美観ヲナセリ。  
一月十六日 月 同  
一月一七日 火 同

一月二十五日 水 - 16 雪  
本日午後五時頃急ニ出発準備ノ命令アリ。直ニ  
之ヲ整ヘ命ノ降ルヲ待ツ。敵ハ我左翼ニ来ルト  
云フ。  
一月二十六日 木 - 15 雪  
本日早朝ヨリ起キ命ヲ待ツ。我師団ハ当分ノ間  
必要無キ様ニテ、一時中止セリ。本日ノ会報ニ  
依レバ露国ノ皇帝・皇后ハ行方不明トナレリ云  
フ。敵ハ我軍ノ為メ囲マレタリト云フ。  
一月二十七日 金 - 10 雪  
昨日午後十二時頃床ニ就クヤ、本日午前一時半  
頃師団ヨリノ命アリテ、直チニ本日ノ食事ノ用  
意ヲナシ、準備終リテ又少時眠ニ就ク。五時半  
頃床ヲ出デ愈出発ノ事定マル。前日第八師団向  
ヒ、本日第五師ノ九旅団及騎兵先発トシテ向ヒ  
タルト云フ。本日終ニ出発ノ命ナシ。出発準備  
ヲ為シ床ニ就ク。  
一月二十八日 土 - 16 雪  
本日同ジク出発準備ヲナシ命ヲ待ツ。本朝ヨリ  
支那車輛ノ監視ヲ命ゼラル。午後四時頃急ニ出  
発命降り、直ニ食事ヲ終ヘ午後五時頃ヨリ李家  
達連溝ヲ出ツ。村ヲ出テ半里程ニテ日没トナル。  
其レヨリ夜行軍ヲナシ、明午前三時小煙台ニ至  
リ軽急露營ヲナシ、支那車輛營兵司令トナリ、  
終ニ終夜一睡ヲ得ル事ナクシテ明朝ヲ向フ。夜  
間風無キモ寒冷甚シクシテ、氷柱口辺ニ連リ其  
冷氣最モ甚シ（里程六里）。  
一月二十九日 日 - 10 晴  
本日午前八時出発ノ命降り村ヲ出テ、西方狼洞  
溝ニ至ル。前日ノ行軍ト不睡トニヨリテ非常ノ  
疲労ヲ得、正午目的地ニ至ル。里程二時余。途  
中露降兵二隊及我負傷兵ノ一隊ト出逢ヒ知ラザ  
ルノ感アリ。本邑ニ至リ露營ノ積ナルニ幸ニモ  
ヨウヤクニシテ一民家ヲ求メ舎営ヲナシ、午後  
十時半命令ノ伝達ヲ聞ク。其大要明日滞在。我  
五師団ハ予定ノ伝地ヲ占領ス。  
一月三十日 月 - 10 晴  
本日滞在。入浴ス。  
一月三十一日 火 - 8 晴  
本日同分隊員棚田氏近傍ノ河ニテ氷ヲ壊キ「ナ  
マズ」ヲ捕ヘ食ニ供ス。実ニ上陸以来ノ生魚ノ  
初物ナリ。  
二月一日 水 - 21 晴

本日精酒一合、菓子三十匁ヲ分配ス。滞在ニシテ無異。

二月二日 木 - 26 晴  
我満州軍ノ左翼軍ニ参加シタル将卒ニ向ヒ、陛下ヨリ詔語ヲ賜リタルヲ以テ、午前十一時頃本部前面ニ於テ奉読式ヲ施行。

二月三日 金 - 26 晴  
本日午後五時頃ヨリ宿営撰定。ソノ為メ東方一里程ナル張家寓棚ニ至リ宿営シ、本隊ノ来ルヲ待ツ。本日ハ旧曆ノ年末ナリ。

二月四日 土 - 23 晴  
本日本隊ヨリノ報ニ依レハ、当地ハ他部隊ノ宿营地ト撰定シタルトノ事ヲ以テ、不得止旧宿营地ニ帰ル。本日加給品トシテ酒一合分配ス。

二月五日 日 - 19 晴  
本日陛下ノ侍従武官ヨリ陛下ノ御意ヲ伝ヘラル。他意ナシ。

二月六日 月 - 21 晴

二月七日 火 - 22 晴

二月八日 水 - 24 晴  
本日正午ヨリ衛兵司令命ゼラレ明正午迄務む。

二月九日 木 - 24 晴  
本日正午衛兵ヲ終ル。

二月十日 金 - 21 晴

二月十一日 土 快晴  
本日快晴一点ノ雲ナク、実ニ我国満州ニ末長ク輝カン事ヲ思ハシム。無事紀元節ヲ祝ス。特別加給品トシテ酒・煙草・菓子等数多アリ。

二月十二日 日 晴

二月十三日 月 晴  
本日天皇陛下ヨリ恩賜ノ煙草、菓子ヲ分配セラル。

二月十四日 火 晴  
本日午後ヨリ明正午マデ衛兵ヲ勤ム。

二月十五日 水 晴

二月十六日 木 快晴  
本日靴足袋ヲ分配ス。

二月十七日 金 晴

二月十八日 土 快晴  
本日清潔検査施行。

二月十九日 日 晴  
本日午前十一時頃ヨリ西南方一里程ナル徐家台ニ至リ宿営ス。午後六時ヨリ衛兵ヲ命ゼラル。

二月二十日 月 曇晴  
晴曇トテ風烈シ、本日午前九時ヨリ西南一里半ナル曹家寓棚ニ宿営ス。

二月二十一日 火 晴

二月二十二日 水 快晴

二月二十三日 木 降雪

二月二十四日 金 晴

二月二十五日 土 晴  
本日ヨリ以後、何時ニテモ出発スルニ応ズル様命アリ。本日新任事務官笹村駒十郎氏来ル。

二月二十六日 日 降雨  
寒気甚シ。昨日ヨリ本日夕刻マデ衛兵勤むヲ行フ。

二月二十七日 月 晴  
寒気最モ強シ。入浴ヲ行フ。本日兎玉主計転任ス。

二月二十八日 火 晴  
寒気強シ。本日午前十時ヨリ出発準備ヲナシ、何時ニテモ出発シ得ル様トナス。

三月一日 水 晴  
本日午前四時頃床ヲ出テ、直チニ食事ノ用意ヲナシ、同六時ヨリ当地ヲ出テ、北方二里余ノ太台ニ至リ命ヲ待ツ。時ニ境年三、及ビ八谷俊一ニ面会シ、正午迄命ヲ待ツ。是ヨリ前途中十時頃ノ銃砲声ノ盛ナル大撃戦。大地モ為メニ一変スルヤト思ワシム。正午ニ至リ三丈子ニ至リ野戦病院ヲ開設スベキ命ヲ受ケ、西北方一里程ナル村邑ニ至ル。其地ニハ砲兵陣地ノ在ル所ニシテ実ニ敵弾来ル事夥シ。殊ニ吾近傍数米突ノ所ニ落下シ危険甚シ。比地ハ衛生隊第一中隊ノ開設スル所ニシテ、之ト交代スル筈ナリシモ前方落弾烈シキ為メ衛生隊ノ進ミ得スシテ、又当地ニ帰ル為メニ南方半里強ノ古城子ニ至リ野戦病院ヲ開設ス。日ノ没スル頃ヨリ明日出迄二千人ノ収容ヲナシ。吾ハ長瀬看ゴ長ノ許ニテ三百許ヲ収容シ、イソガシキ事倒【ママ】ヘガタナシ。

三月二日 木 雪  
本日雪降。前日ノ患者ニ手を盡ス。

三月三日 金 晴

三月四日 土 曇  
本日正午迄ニ、他病院ニ遷ルトノ一説ノ為メ非常ノ繁雜ヲ来ス。

三月五日 日 晴

本日正午迄ニ第六師団衛生予備員ニ引渡シ前進ノ命降ル。午後四時ヨリ北東方三里余ノ新台子ニ至リ命ヲ待ツ。

三月六日 月 晴

本日午前六時頃ヨリ宿舎ヲ出テ東北五里程ノ崔家堡ニ至リ命ヲ待ツ。午後五時命降りテ当地ノ北方ニ於テ野戦病院ヲ開設ス時ニ生ル将校病院ヲ受け収容患者九百八十三。

三月七日 火 晴

三月八日 水 晴

本日当内ニテ患者ニカヲ盡ス。午後五時頃ヨリ南方一里半ナル蘇胡堡ニ患者百六十名ヲ転送ス。

三月九日 木 大風曇

本日南風烈シ。

三月十日 金 晴

三月十一日 土 晴

本日正午迄ニ第四師団衛生予備員ニ引継グ。午後五時頃ヨリ東北方半里ナル大榆樹林ニ至ル。

三月十二日 日 晴

本日午前八時頃ヨリ西南方新台子ニ至ル。

三月十三日 月 酒・煙草 風 晴

本日午前九時頃ヨリ将校ノ用事トシテ服ス。本日鉄嶺落トスト云フ。

三月十四日 火 晴

本日近傍ニ於テハ彼我ノ死体検査ニ至ル。

三月十五日 水 酒・煙草 晴

昨日取調ヘタル死体ヲ取片付ク。

三月十六日 木 曇

三月十七日 金 酒・煙草 晴

三月十八日 土 晴

本日午後三時ヨリ、前院長氏家秀雄ノ分充、並ニ後任青木秀三郎ノ信任式施行。

三月十九日 日 晴

本日午前九時ヨリ前院長ヲ村ノ東北ニ於テ集合シ送ル（酒・煙草）。

三月二十日 月 晴

本日清潔検査下調ヲ行フ（菓子三十匁分配ス）。

三月二十一日 火 半曇

本日午後一時ヨリ新院長各宿舎ヲ検査ス。昨日ノ開【ママ】報ニ開原ヲ我軍占領スト。

三月二十二日 水 晴

三月二十三日 木 晴

三月二十四日 金 晴

三月二十五日 土 晴

本日ヨリ看護壮丁ノ学実科施行ス。

三月二十六日 日 半曇

精酒一合分配。

三月二十七日 月 晴

本日休業。

三月二十八日 火 晴

本日曇天南風強シテ午前八時食事終リテ、同十時頃ヨリ南方二里余ノ沈旦堡ニ至ル。比地ハ我中央軍ノ第一線ニシテ、彼我ノ距離僅ニ千米突ニシテ、其近傍ノ樹木彼我両者ノ彈丸ノ為メ蟬巢ノ如シ。以テ当時ノ状態如何ナリシカラ思ハハ、心ヲ寒カラシム。之ヨリ西南方ニ進ミ柳煙口ニ至ル。村ハ一小部邑ニシテ砂山ハ我師団ノ最も注意スベキ古戰場ナリ。之ニテ昼食ヲ終リ、新台子ニ向テ帰路ニ着ス。時ニ午後五時頃帰村前微雨トナル。帰路ノガン【ママ】着モ。本日精酒一合ヲ分配。当村前院長及新任院長ヨリ精酒を分配ス。夜ニ入り酒宴盛ナリ。

三月二十九日 水 雨

本日雨天。学科ヲ施行ス。

三月三十日 木 雪雨

本日午前二時命下ル。日ク午前八時当地出發。翟家堡ニ舎営病院ヲ開設スベシト。予定ノ時間ニ至リ当地ヲ出テ北方ニ向ヒ翟家堡ニ至ル。本日水雪冷々トシテ道路悪シ。渾河ハ前二回共に氷上ヲ踏ミ至リシモ、全テ氷解ケテ軍橋ノ力ニヨリテ渡ル。翟家堡ニ至リタルハ午後二時半。直ニ前所ニテ舎営病院開設ニ取掛ル。当時我ハ発着部附トナル。本日入院患者ナシ。

三月三十一日 金 半晴

本日入院一名水島中佐ノミ。他異ナシ

## 注

- 1) 総務庁統計局監修『日本長期統計総覧』日本統計協会、1987
- 2) 新井勝紘「従軍日記に見られる兵士像と戦争

の記憶」藤井忠俊・新井勝紘編『人類にとって戦いととは 3 戦いと民衆』東洋書林、2000、pp.136-137 の「表 2 日露戦争の従軍日記」。

- 3) 加藤勉解説・監修、邑心文庫, 2005
- 4) 注2) によると日清戦争の従軍日記は37点存在している。新井自身も指摘するように一般に日露戦争の従軍日記が多いように思われるが、実際は日清戦争のものが多い。
- 5) 巧玄出版、1979
- 6) 水俣市史編さん委員会編『新・水俣市史』水俣市、1991
- 7) 看護兵に関する研究としては、鈴木紀子「陸軍における看護卒教育の始まり－明治6年～7年」、日本看護歴史学会誌 23、2010 や同「陸軍における近代看護学の導入」軍事史学 49-1、2013 などの研究があるが制度史的な研究である。なお、「従軍看護婦」については、亀山美知子『近代日本看護史 全4巻』ドメス出版、1983～1985をはじめ多くの研究が見られる。なお、日露戦争の時に従軍看護婦の戦地への派遣が検討されたが病院船にとどまったようである。
- 8) 酒井修一「小川一真と小倉俊司－日露戦争の大本営写真班－」小沢健志編『写真明治の戦争』筑摩書房、2011年によれば、陸軍が大本営写真班を派遣した。また、民間でも博文館が田山花袋を従軍記者として派遣し、それに「特派従軍写真班」が同行している（大久保遼「日露戦争における視覚の構成 - 誌面構成・従軍写真班・活動写真」マスコミュニケーション研究 78、2011）。①「日露戦争従軍写真帳」にも、惟芳が行っていない旅順の写真なども含まれており、何らかの手段で手に入れたと考えられるものもある。